

# 目次

『心残り』	4
『ノルガ共和国』	16
海を渡って	16
奇妙な夢と緑剥樹	17
夢の正体	18
親父が最期まで信じた男	21
「帰国」	23
再会	23
温泉旅行	23
私と私の大切な人	26
帰国	26
おまけ：ブラチナハーケン小話	27
小見出し1	27
小見出し2	27
あとがき	30

## 『心残り』 1988-1990 あたり

\*\*\*\*\*

その教授室は、いつも静かな空間だった。佐伯は今日も、机に積まれた書類に目を通していた。風に揺られる白い桜の花びらが、大学病院の窓辺を静かに舞い降りていた。教授室の机に向かう佐伯教授の耳に、かすかにドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

ドアが開き、藤原婦長が顔を覗かせた。

「失礼します、佐伯教授。郵便物をお持ちしました」

「ああ、ありがとう」

佐伯は顔を上げ、にこやかに微笑んだ。郵便物を受け取ると、机の上に置いた。その中に一通、見慣れない封筒が混じっていた。差出人の名前を見て、佐伯の表情が少し曇った。

「渡海……」

かつての愛弟子、渡海征司郎の名前が記されていた。佐伯は静かに封筒を開け、中身を取り出した。それは、渡海の父親、渡海一郎先生の九回忌の案内状だった。

佐伯は深いため息をついた。渡海との最後の会話を思い出す。

——私はむしろ、技術の継承以外の部分で、お前に芳しくない影響を残しただけのような気がする。お前を外科の正道に導くことができなかった。それが残念だ。

——それで全部終わらせたつもりか。……うんざりだ。こんなところは、こっちの方からおさらばだ。

神威島。穏やかな海に囲まれた小さな島。佐伯が船から降り立つと、さわやかな潮の香りに包まれた。冬は一面銀世界に覆われることも少なくなく、船が出せない日もあるほど、過酷な環境となると聞いていた佐伯だったが、夏のこの島の風景だけを見ると、到底そんな風には思えなかった。島の中心にある古びたお寺に向かう途中には、昔ながらのどかな田園風景が広がっていた。

お寺に到着すると、そこにはわずかな参列者がいた。佐伯は静かに焼香を済ませた。

「佐伯先生」

後ろから声がした。振り返ると、そこには渡海が立っていた。例の事件から、およそ半年ぶりの再会であった。喪服姿の渡海は、どことなく居心地が悪そうな表情で、佐伯を見ていた。

「久しぶりだな、渡海」

佐伯は穏やかに微笑んだ。渡海は初め、戸惑ったように目を逸らしたが、すぐに真っ直ぐ佐伯を見つめ返した。

「先生……わざわざ来ていただき、ありがとうございます」

渡海の声には、わずかな緊張が感じられた。

「当然だ。お前の父、渡海一郎先生には、本当にお世話になった。そして、お前にもだ」

「……俺は、何も」

渡海はそれだけ言って、黙ってうつむいてしまった。二人はそのまま寺院から少し離れた石段に並んで立つ

て、線香の煙が空に昇っていくのを静かに見つめた。

石段を一段一段降りながら、渡海は佐伯に話しかけた。

「一、三、七回忌とやってきて、次は十三回忌の予定だったんですが、今年は理由あって九回忌を開催することにしたんです」

その理由を尋ねようと佐伯は思ったが、どうにも渡海が思いつめたような表情をしているように見えたので、何となく聞くことができなかった。

二人は境内の一角に腰を下ろし、話をした。佐伯は自分の現在の生活や、東城大の様子を語った。渡海はそれを静かに聞いていた。

「お前がいなくなつて、教室の面々に張り合いがなくなつたように感じる。生意気な小天狗も、お前がいたころと比べてすっかり大人しくなつてしまつた」

「権の字も、いつまでも突っ張つてゐるわけにもいかないでしょう。何だかんだ、教室の連中からの信頼も積みあがつていつてゐるみたいだつたし」

渡海はどこか寂しそうに答えた。

「そんな仲良しごっこに興じるような奴には、私の教室を引っ張つていく資格はない。必要ならルールは変えろ、と鼻息を荒くしているところが奴の魅力だったろうに」

「……前から思つてましたが、先生は、反発されるのを楽しんでいるふしがありますよね」

渡海が今日初めて笑つた。

「優れた者たちが衝突を繰り返してこそ、病院の、しいては医療の発展が進むとは思わんかね」

佐伯の言葉を聞いて、渡海はああ、と懐かしげに、しかし悲しげに、目を細めて頷いた。

その心がどんなにどす黒い憎惡に染まっても、二人で夢を語りあったあの日のことを、渡海は一ミリたりとも忘れたことは無かった。

「……昔、先生が語っていらつしやった夢ですね」

「覚えているのか」

佐伯は少し驚いた表情をした。

「どうして忘れることがありましようか。……あの時は、ずっと先生を見て、追いかけていけば、素晴らしい未来にたどり着けるんだって、信じてたなあ」

憧憬のまなざしで青い空を見上げたと思ったら、ふと我に返ったように姿勢を戻した渡海に、思わず佐伯は「ん？」と声をかける。

「俺……もしかして、この数年ですごいやさぐれてませんか？」

「お前、自覚なかったのか。いつだったか、急患のオペの後始末を私にほっぽりなげて以来、お前の荒みようは酷いものだった。カンファレンスに出ない、資料室からも出てこない。気が付いたら手術控室に住み着いている、後輩は突き放す……」

「でも、私は何もできなかった。外科の正道から外れていくお前を、ただ見ていただけだった……」

「……」

渡海は黙った

「まあ、とにかくだ」

佐伯は話題を戻した。

「お前の存在がそれだけ大きかったということだ」

佐伯が言うと、渡海は深刻な表情をして、苦々しく言った。

「……申し訳ありません。結局、先生の懐刀は俺には務まりませんでしたね」

佐伯は首を横に振った。

「……すべては、私がお前に何も告げなかったことから始まっている。身から出た錆だ。だからお前が気にすることは何もない。私のもとでなくても、お前ならどこでだって、自分の信念を貫けるはずだ」

佐伯は続けた。

「一郎先生も、お前の活躍を望んでいるに違いない。渡海よ。今は、どこで医者をやってるんだ？ 私に協力できることがあれば、遠慮なく言いなさい」

佐伯はそう尋ねたが、渡海はうつすら笑みを浮かべて、伏し目がちに頷くだけだった。

法要が終わり、佐伯と渡海は境内を散策しながらさらに会話を続けた。

「少し、一郎先生の話をしてもいいかね」

今度は渡海の父、渡海一郎についての話だった。渡海は興味深そうに佐伯を見た。

「ええ。ぜひとも。父の話、たくさん聞かせてください。」

——たいそうなレストランで、二人でビフテキを食べた、あの時みたいに。

「ある日、神威島の近くの島まで、先生と釣りに行ったことがあった」

「釣りか。懐かしい。俺もよく父さんと行きました」

渡海が懐かしそうな顔をした。

「それで、収穫はどうだったんですか」

「その日ほとんど一日中粘ったが、結果一匹も釣れなかった」

佐伯は苦笑いした。

“せつかく連れてきてもらったのに、申し訳ない”と私が言うと、一郎先生は“魚を釣りに来たわけじゃないんだ。佐伯くんとかうやってのんびり過ごしたかっただけだから”って、言って下さった。空っぽのパケツをみる一郎先生の表情が寂しげで、ああ、この方は心底優しい方なのだろう、だとあの時強く実感したものだ」

渡海の中で、父の表情が思い起こされたのだろうか、一郎によく似た、寂しげな笑みを浮かべ、俯いた。

「あとは……そうだな」

佐伯は腕を組んで考えるそぶりを見せたのち、思いついたように言った。

「お前が生まれた後、一郎先生が春江さんと一緒にうちに遊びに来たことがあった」

佐伯の言葉に、渡海は目を丸くした。

「俺、そんな小さいときに先生に会ってたんですか」

「そうだ。意外だったか？ まあ、お前は覚えていないだろうなあ」

まだ物心つく前だったからな。佐伯はそう言いながら、渡海に昔話を語った。

「まだ赤ん坊のお前をあやししながら、征司郎は将来きつと、お父さんと佐伯先生みたいな良いお医者さんになりますよ」と……春江さんはそんなことを言っていた」

「母が、そんなことを」

渡海は驚いた表情をする。

「今思えば予言者だったな、お前の母は」

「一郎先生には、もしこの子にその気があつたなら、ぜひとも私に指導を付けてもらいたい」と頼まれた。その時は、何年先の話をしているんだ、この人たちは……とも思つたものだ。ああいうのも、一種の親馬鹿というやつなのだろうか。私には子供がいらないから、分らないが……」

佐伯がふっと、寂しそうに笑つた。

「先生……」

渡海はそんな佐伯を物憂げな表情で見つめた。

ふいに、佐伯が尋ねた。

「……渡海。なぜ、今になって私に連絡をくれたんだ？」

少しの沈黙が流れた。渡海は目を伏せたまま、考え込むような表情を見せたのち、しばらくしてやっと重い口を開いた。

「……佐伯先生を信じられなくなつてしまつたあの時からずっと、今まで親父の法要には、先生を呼ばずにいました。自分は仇に尽くす親不孝者だつたのだと、ひたすらに己とあなたを呪つて過ごしてきました」

佐伯は静かに頷いた。渡海の言葉の一つ一つには、彼の中にある重苦しい感情がこもっているように感じられた。

「だけど真相を知つた今は、父は、先生に会いたがつていいのかもしいないと、そう感じたんです」

渡海は続けた。

「父が亡くなつた後、身辺整理をしているときでした。父が俺に宛てて書いた手紙を見つけたんです」

「手紙には、”佐伯先生を恨んではいけません。なぜなら”と書いてありました」

「なぜなら？ 続きはなかったのか」



佐伯の問いに、渡海は首を横に振った・

「書かれていませんでした。だから、父が本当は佐伯先生のことをどう思っていたのかは、結局のところ分かりません」

その人が本当に思っていることを、他人にすべて伝えることはできません。と渡海は自分を重ねて、苦々しげに言葉を紡いだ

「だけど俺は、父は佐伯先生のことを恨んではいなかったと思うんです」

渡海は真剣な眼差しで、佐伯を見つめたまま、話を続けた。

渡海一郎は、初めは確かにペアンを置き忘れたと思ったのだろう。だから、患者のためを思って、非常識と承知の上で佐伯の上司であった大林教授に直談判しに行った。そして、大林教授からの連絡に、佐伯先生は短い電報を返した。

そして、今になって渡海は思うのだ。その電報を受け取った時点で、父は気づいていたのではないだろうか。ペアンは置き忘れたではない。何らかの事情で外せなかったのだと。

だから、ペアンのことがもみ消されようと、そのことで地方の病院へ飛ばされようと、渡海一郎は佐伯のことを恨んではいなかったのではないか。

「先生のことを、きつと親父は最期まで信じていたんです。だから、いつか俺がそのことを知って、佐伯先生を恨んだりしないように、手紙を残そうと考えたんだと思うんです」

「……一郎先生」

意を決したような表情で、渡海が口を開いた。

「先生。東城大で最後に先生がおっしゃったこと、覚えてますか」

「……」

「先生は俺を東城大へ呼ぶべきじゃなかったって、思ってますんか」

「……」

「先生のことを誤解している間だって、俺は先生のことずっと尊敬していました。尊敬していたからこそ、親父を陥れるような非道を働いたことが許せなかった。そして、裏切られたと勝手に勘違いして、そして……」

渡海の顔が歪み、その頭を掻きむしった。

「いや、そんなことを言いたいんじゃない。東城大で過ごした日々は、俺にとって決して無駄な時間ではなかったんです」

「あなたへの恨みを糧に、外科手術の腕を磨いて、高価な医学書を読み漁った日々は無駄ではなかったんです。俺がどんなに不義理をはたしても、あなたは俺を咎めなかった」

「最後には、俺と違っていい医者になってほしいと、そんな風に思える後輩もできた。……あいつの面倒をみてやれないのが、俺の少々の心残りです」

つくづく自分は人の指導が向いていないんだな、と実感しています。と渡海は苦笑いした。

「先生、俺は先生に感謝してるんです。先生が後悔するようなことは何もなかった。そのことは伝えたかった。今日お呼びしたのも、それを伝えるためです」

「渡海……」

「先生。俺は来週、海を渡ろうと思ってるんです」

俺の名前にピッタリだと思いませんか、なんて付け加えて、渡海は笑った。

——だから、このタイミングで私が呼ばれたのか。

佐伯は自分がここにいる意味が少しわかったような気がした。

「それで、どこへ行くんだ？」

「アフリカ大陸にある、ノルガ共和国という国です」

「ノルガ共和国……か」

佐伯は知っていた。その国は今も内線状態にあること、きっと今この瞬間も、あちこちでゲリラが紛争を起していることを。

「……日本にはもう戻らないのか」

「それは……分かりませんね。気分次第です」

「帰ってこられるのか？」

「確かに、それも分かりませんが、まあいいでしょう。……今の俺には帰る場所も、守るものも何もないんで、ね」

渡海は自虐的な笑みを浮かべた。そもそも、同じ場所に「〇年」も留まり続けたのが自分らしくなかったのだ。

と渡海は言った。自分は、終の棲家というものを持つ気はない。渡り鳥のようにこの人生を転々と生きていきたい。

もう渡海は佐伯と関わる理由もないのに、どうしてか、渡海は自分のそんな思いを佐伯に伝えたかった。

「でもだからこそ、できることは何でもしよう、って思ってます。こいつと一緒に……」

渡海はジャケットの内ポケットから包みを取り出し、中の銀色のペアンを佐伯に見せた。

「渡海……」

佐伯の目頭は今にも決壊しそうだった。唇を震わせながら、佐伯はじつと渡海を凝視した。

「先生も夢を果たすまで、くたばったりしないでくださいよ。俺はもう……おそばには居られないけど。でも海に向こうでずっと、先生の夢がかなうように、お祈りしてますから」

渡海の方も、瞳が潤んで、目元がすっかりはれ上がつっていた。

「……渡海。せめてものの私の願いを聞いてほしい」

佐伯は、渡海の両手を取って、握りしめた。

「私が生きているうちに、一度でいいから、また元気な顔を見せに来てくれないか。……一郎先生の時はずれが叶わなかった」

「……先生」

渡海の中から、一筋の涙がこぼれた。渡海は、あふれそうな感情をこらえながら、佐伯の手をぎゅっと握り返した

「またきつと、会えます。そんな気がします」

——きつと、大丈夫です。

渡海の心が佐伯の持つペアンのように、真っ暗に染まってしまったあの日から、ずっと違う方向をみているはずの二人が、また再び同じ方向を向いて、同じ夢を語ることができるようになったのだから。

——ね、そうでしょう。先生。

渡海は、昔のような真っ直ぐな笑顔を佐伯に向けた。佐伯もまた、普段の不敵な笑みとは異なる、父親が息子に向けるような、海原のような優しい笑みで、渡海を見つめた。

線香の煙はまっさおな青を突き抜けるように、高く、高く立ちのぼって、二人の視線の先にある海を越えて

い  
っ  
た。

『ノルガ共和国』天城先生が亡くなる年 1991・1992・

\*\*\*\*\*

海を渡って

飛行機の中で資料に目を通す渡海先生  
国の背景を記載

ノルガ共和国にて医務官として活躍する渡海先生。日本でも指折りの外科医としての腕は、設備に乏しい途上国にあってもその輝きを失わずにいた。それでも助けられないは数多くあつたけれど。

自分の力、更には医療そのものの無力さを、渡海は毎日のように心の底でひっそり嘆いた。そうありつつも、日本のような、やれ論文を出せだの、あの先生は出世しそうだから今のうちに付いておこうだの、そういうふうでもないしがらみがないのは、やはり自分の性にあつているとも思った。

ふと、日本にいるであろう、自分が最期に指導した研修医の世良や、あの時法要で別れたっきりの佐伯のことが思い出された。

「世良ちゃんは、いい医者になれただろうか」

「佐伯先生の夢は叶ったんだろうか」

渡海は半年か年に一回くらい、露天に売られているポストカードを買った。それに一言だけ書きいれて、領

事館に用事があるときに、ついでに持っていった。

### 奇妙な夢と緑剥樹

ある暑い日の夜のことであった、渡海はおかしな夢を見た。

渡海が気が付くと、そこは病院のような、ホテルのような景観の建物の中だった。真夜中に渡海はひとり、その中の中庭のような空間に突っ立っていた。こんなに寝苦しい夜なのに、温度や湿度が分からない。素足でコンクリートの上に立っているのに。ひんやりとした感触もしない。まるで魂だけが宙に浮いているような感覚だった。

突然泉の方から声がした。見るとギリシャ神話に出てくる女神様のような風貌の女性が泉に浮いていた。ひざから下は透けて見えなかった。女性の周囲だけ照明に照らされたかのようにほのかに光っていた。女神は渡海に問いかけた。

「あなたが落としたのは、金のペアンですか、銀のペアンですか」

「は」

渡海は意味が分からなかった。いや、これは夢だ。いわゆる明晰夢というやつだ。

身体感覚とは裏腹に、やけにはっきりしている意識でもって、渡海は女神の問いに答えた。

「何が何だかよくわからないんだが……。そりゃあ、俺が持つてるものなんだから、銀のペアン……かな」

渡海の返答に、女神の表情が曇ったような気がした。顔はぼやけたままでよく見えなかったが。

「あなたは嘘をつきましたね、それでは、何も返してあげられませんよ」

「はあ？ それはどういう……」

渡海が聞き返そうとしたとき、テントの外で朝日が立ち昇ったような感じがして、そこで夢は終わった。

朝渡海が起きたら、そこは野営テントの中の、いつもの簡易ベッドだった。渡海は日本にはいないのだから当たり前だ。外に出れば、紛争地の荒れた景色が視界に広がった。日本のことを思い出したから、妙な夢を見たのだろうか。

普段の業務にあたる渡海先生。今日は外務官の娘——高校生くらいだろうか——が、帝華大のやぶ医者が書いたインチキ本を熱心に読んでいたので、基礎がしっかりした本と取り換えてやった。

お酒を麻酔代わりに使って応急処置を試してみたり

少女のわがママを聞いて、青い花を摘みに行ったがために、鉛玉打ち込まれて死んでしまった可哀想なメイドの死をひっそり悼んでみたり、その少女の悲しみに心を寄せてみたり。

（緑剥樹の下で、の描写もここに）

## 夢の正体

その日の夜も同じ夢を見た。その次の日も、そのまた次の日も。夢の内容はいつも同じで、見るたびに中身をはっきり思い出すことが出来た。

何回も夢を見るうちに、渡海先生は徐々に、泉の精霊が現れる前に何かをしたことを思い出していく。

「そうだ、あの女神が現れる前に、俺はあの泉に何かを投げ込んだんだ」



そして何回目かの夢で、やっと自分がペアンを落としたシーンを思い出す

「俺が泉に落としたのは、黒いペアンだ」

「あの時の俺は、ペアンの意味を誤解していた」

「飯沼さんの腹に眠る銀のペアンは、そのままではレントゲン写真に写ってしまう。そこまでごまかしたとしても、いずれ火葬された際には明るみになる。だから、飯沼さんが元気なうちに、どこかで秘密裏に処理する必要があるはずだった」

「そこで俺は、佐伯先生は、いつか機会を見て、銀のペアンと黒いペアンを入れ替えようとしてるんじゃないか」と考えた。ペアンがカーボン製なのも知っていて、レントゲン写真に写らないのも、燃やしたら灰になることも、分かってたんだ」

「普段から黒いペアンを使うのも、そこに違和感を抱かせないため。あのペアンは、俺からすれば隠蔽の黒に染まった代物だったわけだ」

「そこまで考えたのに、ペアンをなぜ抜かないのかはわからなかった。今思えばそこにもっと注目するべきだった。憎しみで曇った目にはそれが見えていなかったんだ」

「俺は、医療過誤で真っ暗に染まったペアンを捨てて、消してしまいたかったんだ。佐伯先生からそいつを切り離したら、昔に戻る気がして」

「そいつを持つてるのが佐伯先生だって、信じたくなかったんだ」

「やがて信じたく無いという思いすら、憎しみに覆われて無くなってしまった。その時から夢は見なくなつた」

「レントゲン写真を眺めながら、ラブソディに浸る日々が続いた」

ずっと忘れていたのに、どうして今になって思い出したのか。

「あなたが落としたのは、金のペアンですか、銀のペアンですか」

「俺はそこに黒いペアンを投げ込んだ。落としたわけじゃない」

顔のぼやけて見えない女神が、やっと渡海に微笑んだ。

「正直者のあなたに、このペアンを差し上げましょう」

女神は、渡海が最初に泉に投げ込んだのであるう、ブラックペアンを差し出した。

「いいや、要らないよ。かといって、金や銀のペアンをもらっても困るし、何もいらぬ」  
「どうしてですか」

「……それは俺んじゃないんでね」

渡海は皮肉な笑みを浮かべた。

「そいつは、親父が最期まで信じた男の、俺が誰より尊敬する男の持ち物だ。……だから」

渡海は女神に背を向け、歩き始めた。辺りはいつの間にか真夜中ではなくなっていた。

「返すよ、あの人に」

それ以来、変な夢を見ることは無くなった。

その日渡海は領事館を訪ね、航空券のチケットを手配できないか、外務官に尋ねた。

### 親父が最期まで信じた男

懐かしい差出人から、時折届くポストカードをみて、佐伯先生もまた回想してた飯沼さんのことを、渡海先生に言わなかった理由は、

原作：一郎先生が自分を恨んだまま死んだと思ったから。違うと弁明しても意味がなく、渡海先生にも信用してもらえないと思ったから

ドラマ：一郎先生は全部わかってた、なんて言っても信用してもらえないと思ったから。死人に口なし。分かってもらうには、患者の体性を、ペアンを摘出するしかない。

結局のところ、佐伯先生は本当の意味で渡海先生を信じてなかったのだ。信じて本当のことを彼にだけ伝えていれば、飯沼さんをむやみに危険にさらすことはなかったかもしれないのに。佐伯先生は自分の行いをひどく後悔する。一郎先生の名誉にかけて守らなければならない患者を危険にさらしたことも、息子の渡海先生に無為な〇年を与えたことも。

今の仕事っぷり（どうも引退しているっぽいので、せいぜい高階院長にちよっかいかけるくらいだろうか）

最新のポストカードには、丁寧な字でこんな一文が添えられていた。

――“ ○月○日、日本に行きます。先生にも、会えたら嬉しいです。”

## 「帰国」 1993-1999

\*\*\*\*\*

目標一万字

### 再会

日本に一時帰国する渡海先生。

オフの佐伯先生とお出かけがいいな。極北に帰ったら世良ちゃんに、東城大に帰ったら高階先生に会えます。刑務所にいるかもしれない、垣谷先生は元気でしょうか。

どうしますか？

待ち合わせは東城大の旧館ビオトープ。

現役引退した佐伯先生は患者として来院し、高階先生黒崎先生がビビる。速水田口島津？若手はあまり面識ないので、優しそうなじいさんじゃん、と好印象。オペ中の鋭い目つきとサンダル弾を知らないから…。

旧館へ向かう佐伯先生を目撃する高階先生、あ、まさか……と勘づく

同じく東城大。全身黒の長身の男が入って来て、同じく旧館へ。

なんでここで待ち合わせなのか？渡海先生は疑問である。

また、懐かしの手術控室に入ってみる。レコードはまだ残っているだろうか？

最上階の旧病院長室は誰かが最近まで使っていた痕跡がある（天城先生・・・）

佐伯外科解体騒動の時は渡海先生は戦場でお医者さんしてたので、いつの間にか現役を引退してる佐伯先生にびっくり。もう先生のコンチエルトは見られないのか、と残念がる渡海。

執刀医や助手はもう二度とないだろうが、バックヤードや、人が足りないときに鉗引きとかはやっている。月に一回程度だが若手を集めて指導会なんてこともしているよ、お前には特別に個人レッスンしてやってもいいぞ

なんてな。まあ、お前には不要だな。

私も戦地暮らしが長くなりましたから、ここに戻ってくるのならば必要かもしれません。あそこでは設備も時間もない中、どうやって命を繋ぐか、そこにただ必死で。だから大学病院の外科医としては、知識は遅れているだろうし、勘も腕も鈍っているかもしれません。

自分が最前線から離れている間に、医療は目覚ましい発展を遂げているであろうことを渡海は理解していた。発展の二文字から遠く離れたこの国で、渡海の情報源といえ、時々やってくる医務官との交流と、たまに領事館に届く古い医療冊子が関の山だった。

佐伯先生は杖持って歩いてそう。よろけたりしたら渡海先生が介助する。周りから見たら親子のようにも見える。渡海先生は歳の割に若く見えるので、祖父と孫のようにも見えた。

渡海先生も両親を亡くして久しいので、そんなに悪い気はしなかった。佐伯先生は子供もおらず、自分が生きているうちにもう一度会いたいという何十年も前の約束をかつての愛弟子が覚えていて、更にはそれを実に海を渡って来てくれたことが嬉しくて仕方がなかった。

携帯電話を見る二人

「あれがあつたら」

情報不足な電報もいらなかった、渡海一郎先生が無理に上司にかけあう必要もなかっただろう。

「買おうかな」

「向こうではさすがに通じんだろう」

「ですよ。じゃあ、先生は？　携帯電話、いかがですか」

「連絡を取る相手がいない」

「はは、先生らしいや」

ビフテキという名のサイコロステーキを食べる渡海先生。佐伯先生はさすがにもう70歳？だからステーキは厳しいかなあ  
一口だけ渡海先生があーんしてあげて欲しいな。

さあ、極北へ行こう。渡海先生の故郷へ！

## 私と私の大切な人

東城大の高階先生、田口速見島津先生

極北市民病院、2人の医者でなんとか運営中。院長の世良ちゃんと今中先生。

速水先生はこっちに飛ばされてるのか？時系列が不明。ひかりのけん（これも読んでないが）で途中まで伝えた言葉の続きを速水先生は答えてくれるかもしれない。

刑務所にいるかもしれない、垣谷先生。。。

また10年ほどたって、渡海先生帰ってくるぞ、今度は日本に帰国するかも……？と匂わせて終了。



## おまけ…プラチナハーケン小話

\*\*\*\*\*

こつちを箱根旅行にしよう

根詰めて病院にこもりつきりだった渡海先生を気分転換で佐伯先生が連れ出す

(6年後は定時帰宅してるけど、当時は渡海先生、馬鹿が付くほど真面目だったのだ)

「てか先生飲みすぎですよ、いくら明日休みだからって。明日も観光するんですよ。俺が運転してる間にお酒抜けなかったらどうするんです」

「ほら、水、水を飲んでください。そのままじゃ二日酔いですよ」

## 小見出し1

## 小見出し2

佐伯は、診察室の椅子に座る渡海を見つめながら、ふと昔のことを思い出していた。

「渡海、覚えているか？君が初めてこの病院に来た日のことを」

渡海は眉をひそめた。「別に、特別な日じゃありませんよ」

佐伯は微笑んだ。「そうか？ 私にとっては印象深い日だったんだがな」

「佐伯先生、この治療方針について、ご相談があります」

会議室で、若き日の渡海が真剣な表情で佐伯に話しかけていた。

「どうした？」 佐伯は興味深そうに尋ねた。

「はい。この患者さんの場合、一般的な方法では十分な効果が得られないと考えます。新しいアプローチを試してみたいのですが……」

渡海は緊張しながらも、自信を持って自分の考えを説明し始めた。その斬新なアイディアに、佐伯は目を開いた。

「あの時、君の真摯さと才能に感銘を受けたよ」 佐伯は静かに言った。

渡海は少し照れたように目を逸らした。「当然のことをしただけです」

佐伯は続けた。「君は昔から患者のためなら何でもする。その姿勢は今も変わらないな」

深夜の医局。疲れた様子の渡海が、複雑な症例の資料と向き合っていた。

「まだ帰らないのか？」 佐伯の声に、渡海は振り向いた。

「先生………はい、もう少しで」

佐伯はコーヒーを差し出した。「患者のためとはいえ、休息も大切だぞ」

渡海は少し戸惑いながらも、コーヒーを受け取った。「ありがとうございます」



## あとがき

書くにあたって原作を何周も読みましたよって話とか（読んでない）

ブラチナハーケンみんな読んでねって話とか、渡海先生の現在は描かれないのかなあ、とか。

ドラマと違って原作は昭和が終わって平成が始まるぞ、という年代設定ですが、自分は当時赤ん坊（年がばれますけども）で全く実感がわかないので苦労しました。文章に空気感を盛り込みたい気持ちはあったのですが、体験していないことを書くのはやはり難しい……。

ところで、電子カルテ、私が小さい頃は紙とパソコンが半々くらいだった印象です。お世話になった記憶の中では眼科の先生は紙でしたが、小児科の先生は当時からパソコンでした。ブラウン管のモニターに、やたら音のでるキーボードをカタカタ言わせていた記憶があります。また、ドイツ語が読めないとカルテが読めない、なんて話を聞いたこともありました。今はどうなんでしょうかね。論文は流石に英語なんじゃないかと思ってるのですが…。

電子カルテが誕生する以前は、1970年代から少しずつ医療現場の「IT化が進んできました。IT化の先駆けとして、診療報酬明細書を作成できるレセプトコンピュータ（レセコン）が使用されはじめました。レセコンに続き、診療支援ソフトも登場しています。

医療ICT化の一環として1999年に電子カルテが登場しました。厚生労働省の示す「医療情報システムの安

全管理に関するガイドライン」の3原則である真正性・見読性・保存性を満たしていれば、電子データとしてカルテを保存できます。

また、携帯電話の歴史もちょっと調べるようになりました。ブラックペアンのお話は、スペインの片田舎にいた佐伯先生が、渡海一郎先生にしつかり連絡が取れていたら成り立たないため、作中に携帯電話なんてものは存在してはなりません。

総務省のHPによれば

1985年には、ショルダーホンが登場。重さは約350gもあり、本体の価格（かかく）が保証（ほしょう）金約20万円、月額（げつがく）基本（きほん）使用料が2万円強、通信料金は1分100円と高額だったので、一部の人が利用するだけ

1987年に入り、NTTが「携帯電話」サービスを始めました。この携帯電話の端末はショルダーホンより小型化（こがたか）・軽量化したものの、750g（500mlのペットボトル1.5本分）の重さがありました。

1991年、NTTから、当時世界最小とされた超小型携帯電話 nova（ムーバ）シリーズの端末が発売されました。当時としては画期的な折りたたみタイプもあり、発売当初の本体重量は約230gと従来（じゅうらい）機種に比（くら）べ小型・軽量化していました。

1993年からはそれまでのアナログ方式（第1世代）に代わるデジタル方式（第2世代）サービスが開始されました。初期費用（ひよう）は保証金10万円と新規（しんき）加入料2万円強で、レンタル料を含（ふく）む月額の回線使用料は1万2千円でした。

1993年、NTTドコモは当時10万円だった携帯電話の保証金を廃止（はいし）しました。

1994年に端末売却制度、利用者が端末を所有できるようになり、それまで通信事業者からレンタルしかできなかった仕組みを改めたというわけです。

1999年には携帯電話の料金認可制（にんかせい）が廃止されました。

ブラックペアン本編ではシオルダーホンからもう少しコンパクトになったあたりのようです。天城先生がやってくるのがそこから3年後、1991年ですが、ちょうどこの年にはMOVYが発売されたそうです。折り畳みの、古い携帯電話の姿がこのあたり……。お医者さんは緊急の連絡が必要な機会が頻繁にあるでしょうか、名門大学の帝華大の先生（とそこからやってきた変わり者の高階

することもあったのかもしれませんが。  
天城先生なんかは、日本のお土産で買ったたりしないのかな。手紙を送  
たのでしょうか。

を購入

万だっ